

# 原点の新人時代

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年4月16日

この季節になると、自分の新入社員時代を思い出す。

小さい頃からずっと新聞記者志望だった。しかし当時、女性記者を採る社はほとんどない。えに、オイルショック後の不況で、前年に女性記者を採用していた所は、試験はしても採らなかった。

途方にくれているところに、まだできて2年目の、TVドキュメンタリーを専門に作っている制作会社が、男女を問わず募集していることを知った。

最初の仕事は、編集助手だった。朝早く行き、編集室のトイレ掃除から始まる。そのころはまだビデオではなく、16ミリフィルムで番組をつくっていた。

徹夜で編集作業をした跡の、フィルムの切れ端が散らばっている。それを片づけ、編集機材についた汚れを落とし、すぐ作業のできる状態にする。薄暗いフィルム倉庫に一日中こもり、汗だくで、山と積まれた重いフィルム缶の整理をする……。

テレビの世界は派手に見えるが、こうした裏の下積みの人がいなければ成立しないことを、身体で思い知った。

次の試練が“名刺が通じない”ことであった。半年後に、調査の仕事に移った。今はテレビ番組の大半が、制作会社の手になることは知られている。しかし、制作会社のはしりだった。〇〇新聞、〇〇テレビと言えはすぐに応じてくれるものを、自分が何者であるか必死に話し、熱意をもって誠実に意図を説明しなければならない。会社ではなく、まず個人を信用してもらわなければどうしようもなかった。

大マスコミに入っていたら、おそらく体験しなかった数々の事柄。それがその後の、私の仕事の原点になっている。